

平成7年度

生徒を育てる学校教育相談の方向を模索する

川崎市総合教育センター カウンセラー研修員

生徒を育てる学校教育相談 の方向を模索する

カウンセラー研修員 大塚 一雅¹

はじめに

現在「いじめ」「不登校」の問題は年々深刻化している。「いじめ」が原因で、将来のある中学生が自殺にまで追い込まれたという報道が、残念なことに繰り返されており、そのつど心が痛む。

また、「不登校」の問題も、生徒数が減少しているにもかかわらず割合は増加の傾向にある。中学校の場合は学級に一人の不登校生徒がいてもおかしくない割合になっているという。これらの問題を教師の一人として深刻に受け止め、どのように取り組んでいったらよいか、問題解決にむけ先生方と協力して取り組んでいきたい。

いままで、担任教諭として、また生徒指導担当教諭として自分なりに問題解決にむけて取り組んできた。自分の学級で「いじめ」「不登校」等が起きた時、学級担当として、そのつど指導方法や対応の仕方をどのようにしたらよいか悩んだり、迷ったりしてきた。しかし、保護者の協力、他の教師のアドバイスで何とか解決の方向へ進むことができてきた。そのような体験を通して、自分なりに教師としての指導法をつかんできたつもりでいた。だが、昭和50年代後半の校内暴力が全国的に吹き荒れたとき、勤務していた学校もその渦の中に陥り学校は大変荒れてしまった。いままで、自分が行ってきた指導法では生徒たちを全く指導ができなくなってしまった。

このことを通して、教師主導型では生徒を理解できないことを痛切に感じ、私自身も大きく変わるようになった。私はいままでの指導法を反省し、まず、生徒に対する言葉づかいに気をつけることからはじめ、一人ひとりの生徒を理解するように努めた。今思えば良い経験をさせてもらったと思う。このことが、教師として生徒をどう理解し、どのように指導することが生徒の個性を尊重し、心豊かな生徒を育てることにつながるのかを考える機会となった。

そして、今年度、カウンセラー研修員として川崎市総合教育センターで教育相談について研修する機会を与えていただいた。現在、生徒指導担当教諭として担任の先生方とともに「いじめ」「不登校」をはじめ、様々な問題を抱えた生徒や保護者と関わる機会が多い。学校内の教育相談の企画をさせていただく機会もある。カウンセラー研修で得たことを生かし、日々の教育活動に教師集団がどのような共通意識をもって取り組むべきか考えていきたい。

さらに、再度、自分自身を見直し、教師としての資質を高めていきたいと思う。

I 主題設定の理由

中学校では、日々の教育活動の中で生徒一人ひとりと落ち着いた環境で話をする機会が少ない。そのようななかで、反社会的な問題行動、いじめの問題、不登校の問題等が現れる。反社会的な問題行動を解決するために生徒やその保護者と関わりを持って問題の解決にむけて取り組むが、生徒と教師、保護者と教師の信頼関係が不十分では本当の意味での問題解決にはつながらない。こうした場合には生徒は同じ様な問題を繰り返してしまうことが多い。そのような場合、保護者との協力体制も確立できず、指導も訓示的、支持的な指導法となってしまうがちである。

時に、いじめの問題の解決のためには早期の発見が重要だと思う。生徒をよく観察し、保護者やいじめられている生徒自身からの訴え、周りの生徒からの情報等が重要である。教師の日々の観察からいじめを発見できる場合も見られるが、保護者や生徒からの訴えではじめていじめを知り、その解決を図る場合も多く見られる。反面、教師に対する信頼の気持ちがないために生徒、保護者からの訴えが遅く、いじめが深刻化してしまう場合も多くある。

生徒たちが明るく伸び伸びと成長していくために、生徒と教師の信頼関係を深めることが重要である。信頼関係を築いていくためには教師として、生徒とのふれあいを大切にする必要がある。そのためには、まず、教育活動全般で「相手の気持ちを相手の身になって感じ、相手の気持ちと通じ合う人間関係を大切にする。」「一人ひとりの生徒をかけがいのない価値ある存在として大切に受け止める。」ことが重要であると言われているが、実際にそれを行うことは難しい。生徒を理解するために生徒一人ひとりと計画的、継続的に接する機会を持ち、個々の生徒が抱えている問題等を教育相談を通して解決していけるようにしたい。

また、生徒は本来「知りたい」「何かをしたい」という意欲を持っていると思う。悩みや心配事を解決することによって、生徒自身が自ら学び、自主的、主体的に取り組む気持ちが高められると思う。教育相談を通して生徒を認め、生徒の成長を援助したい。

そのために、今回の研修で教育相談のもつ意味を探り生徒を育てる教育相談のあり方を学びたいと考えた。さらに、校内の生徒指導研修会等、教職員に伝達する機会をいただき、ともに学び、教職員相互の共通理解を深めていきたいと考え、このテーマを設定した。

¹ 川崎市立宮崎中学校

II 研究の方法

1. 受理会議、事例会議に参加して、インテークの意義や主訴の内容分類について学ぶとともに、教育相談の目ざすものは何か等について学ぶ。
2. 教育相談基礎研修講座、教育相談実習研修講座に参加して、カウンセリングの意義、技法等について学ぶ。また、文献や資料を通して教育相談と学校カウンセリングの関連等を学ぶ。
3. 総合教育センターで実際の相談ケースを担当し、実践を通して体験的に研修する。

III 研究内容と結果の考察

1. 受理会議、事例会議を通して

不登校生徒との関わりのなかで、学級担任であったときは、なんとか学級担任であるこの一年間で不登校の生徒を登校できるようにさせたい、という気持ちが強く、家庭訪問をしては登校を促すことが中心となり生徒自身や保護者の気持ちの配慮に欠けていたように思う。生徒指導担当教諭になってから各種の研修会、講演会に参加し、その対応について多少なりとも客観的にとらえ、判断できるようになってきた。しかし、とかく登校できない原因を探り、その原因を取り除くことだけを主眼に置いていたように思える。

受理会議に参加して、不登校を主訴とする教育相談が余りにも多いことに驚いた。しかし、主訴は不登校ということであっても、一人ひとりみな違いがあるということが改めて確認できた。

インテークの報告から、主訴を様々な方向から考察し、検討し、今後の教育相談のよりよい方向性を探っている。なによりも、まず第一にカウンセラーが相談に来た人を温かく理解しようと努め、背景にある問題を考慮して教育相談を行おうとしていることがよくわかった。

さらに、広く応用できるカウンセリングの方法として受容と傾聴を中心とし（誠意をもって親身に対応することがあるが）これによって、相談に来た人はしだいに心を開き、悩みや不安、迷いなどを自分で解決していこうとすることを実感した。継続して教育相談に来所するということは、相談に来た人がカウンセラーを信頼しているからこそと思う。

また、事例会議で数年間に渡る事例が報告された。相談に来た人の心を変容、気づきが生まれ、問題が徐々に解決されていく姿を知ることができた。カウンセラーと相談に来た人、相互の信頼関係が育っていったからこそと思う。

これらの会議に参加して感じたことは、相談員と相談に来た人との信頼関係を基盤に様々な角度から一つの問題を共に考え、焦らずに、自らの力でこの問題を解決していこうとする意志がもてるようになることが大切であることを学んだ。

学校でセンターと同じ様に相談活動をするのは難しい面もあるが、その問題について保護者や本人と教育相談を通して、信頼関係を深め、問題の解決を共に図っていけるよう心がけたい。

2. 教育相談基盤、実施、実習の講座を通して

多くの講師の先生方から教育相談のあり方、意義について学ばしていただいた。

学校における教育相談の役割や目的として

- ・ 中学校の在学中にわたって、その生徒の発達段階における発達課題を解決するために行われるもの。
- ・ 生徒の自発性を重んじ、生徒が自主的に解決でき、かつ、効果的な問題解決の方法を学習することにより自己指導力を高める。

このようなことを踏まえて、生徒と触れ合い、相談活動を行っていくことが大切であるということを知った。それを実現するために、教師が生徒との温かい人間関係を大事にすることをはじめ、以下のような教師を目ざして努力していくことが必要であるということも学んだ。

- ・ 生徒にとって魅力ある教師。
- ・ 生徒の小さな変化をとらえ、励ます教師。
- ・ 自ら変容することのできる教師。

教育活動のなかで相談の環境がきちんと整った場面で教育相談も大切だが、学校現場では授業中、あるいは廊下ですれ違ったときなどのチャンスをとらえたチャンス相談等も教育相談として大切にしていきたいと感じた。

実技、実習講座の研修ではすぐにでも中学校のなかで行いたいことが多くあった。

その1つがグループワークトレーニングである。グループで、ゲームや課題解決を互いに協力しあい取り組んでいくのだが、実際に経験し互いの意見を尊重しあう素晴らしさを感じることができた。中学校では小グループで活動する場面が数多くある。そこにはリーダーがいて、指示を出し活動を行うことが多い。お互いの意見を尊重し理解したうえで活動するというよりも、リーダーが中心となり、グループがリーダーに依存した形を取ってしまう。そのような方法では「やっ

ている。」というよりも「やらされている。」という気持ちで活動してしまう。中学校の活動場面ではそのようなことも必要な場面もあるが、個々の生徒の自発性を高め、生徒同士の相互理解、生徒と教師の理解のためには可能な限り、互いの意見を尊重しあえる活動を作り出していくことが必要と思った。

また、ロールプレイやミニカウンセリングの演習を経験し、「相手の身になって感じること。」が教育相談では必要であることを学んだ。実際に、逆の立場の役割を演じると、こんな時にこう感じるのかと改めて生徒の気持ちを味わうことができたように思う。また、実際に5分間のミニ・カウンセリングの録音テープを聞くと、共感する言葉を投げかけることで、話す人はより深い内容を話しかけたり、話が発展していく様子がわかり、傾聴すること、共感することの大切さが理解できたように思う。

ちょっとした動作や言葉が相手の気持ちを和らげもし、反面、もう話したくないと思う気持ちにさせてしまう。普段から生徒との接し方に気をつけ、適切に関わりができるよう心がけていきたいと思った。

3. カウンセリングの実戦を通して

総合教育センターの教育相談で子担当をさせていただいた。そして、いままで研修した傾聴に心がけ面接を行った。まず「今日、あなたはどのような方法でここにきたのかな。」「ここへ来るのは大変だったかな。」と問いかけた。「自分から話すことができないので、質問をしてください。答えますから。」と恥ずかしそうに下を向きながら答えた。リレーションをつけ、緊張を和らげるように相談を進めようとしたが、実際は難しかった。こちらからの質問に「はい。」とうなずくだけだったり、沈黙が続いたりする状態だった。ただ黙る時間だけとなってしまう、辛く長い沈黙の時間だった。私の心の中にはそのとき、自分の教育相談の進め方の反省ばかりであった。しかし、何回か教育相談を重ねるなかでリレーションもつき、笑顔で質問に答えてくれるようになり、私に対して質問もしてくれるようになった。なぜ学校に行けなくなったのかということでも、自分から話してくれるようになった。

さらに、面接が進む中で、面接の最初は体を動かすことを拒否していたが気分転換に卓球に誘ってみるとやってみたいとの意志を示してくれた。面接を重ねる度に卓球が上手になっていく。自分に自信がついたのだろうか。

あるとき、卓球をして上手にスマッシュが入った。そのときは、今迄に見せたことのないような喜びを体全体で表し、ガッツポーズを見せた。私もその姿をみ

て何とも言えない嬉しさを味わった。

この面接を通して、カウンセラーの一言一言あるいは、表情、態度に非常な重みを感じた。問いかける言葉で相談に来た人の心が揺れたり、気持ちを整理したりしながら自分を振り返る姿を感じ取ることができた。相手の身になって感じることの重要性和、相談に来た人は私になにかを求めていること、それに答えきれない私の無力感を痛切に味わった。

・中学校の相談活動を生かして

ある担任の先生の依頼で不登校の生徒の保護者と面接をする機会があった。保護者と面接をしてみると、中学校に入学して3日間登校しただけで、不登校になってしまったという。保護者は登校させたいと様々な手を尽くしたが、思うように行かず、学習の遅れも心配して焦っている感があった。生徒にも会うこととなったが、面識が全く無く、どのようなことになるか不安を抱えて家庭訪問をした。いままでなら、本人と話すなかで学校に来るように色々と言ひ方をしてしまうことが殆どだった。今回、ラポールをつくるために、週一回の家庭訪問では、本人の好きなチェスをして過ごしたり、マンガの話をしてたりして時を過ごした。家庭訪問を重ねるなかで本人も段々と心が和む様子が見られるようになってきた。今回の研修がなければ、私は家庭訪問の際は何とかすぐに登校させようと登校刺激を与えることだけを考え、ゲームをして過ごすことなどは考えもしなかったと思う。担任の先生と連携を取り家庭訪問を続けているが、現在は放課後、登校し、教室に行ったり、体育館で遊ぶことができるまでになった。遊びを通して人間関係を深め、本人の自発性を大切にしていくことの重要性を経験したように思う。今後も、担任の先生との連携を密にし、保護者と協力して取り組んでいきたい。

・生徒指導研修会で教育相談演習の実施。

本校における教育相談はいままで、テスト前の部活動中止の期間を利用して、担任の先生が中心になって教育相談を進めてきたが、会議等で時間が十分に確保できなかったことや担任裁量による実施のために、その取り組みには学級によって差が見られていた。そこで、今年度は教育相談に対する意識を高めることを重点課題として計画を立てた。

幸いにして、校内に教育相談について研修された先生がいらっしゃったので、その先生の援助をいただきながら教育相談実習で研修した教育相談演習を行った。職員を6人のグループにわけ、シナリオ・ロールプレイを実施した。先生方には生徒役、先生役のどちらかを1回は行ってもらい、振り返りの時間を充分に取るように心掛けた。ロールプレイは知っている人同士の

ときはやりにくいということを聞いていたが、2時間、真剣に取り組んでいた。特に、振り返りの話し合いでは普段、接している生徒が浮かんでくるのか、具体的なケースと重なり大変に有意義な様子だった。

・教育相談週間の充実

夏休み、冬休みの開けの週を教育相談にあて、担任による教育相談、副担任による学習相談を実施した。担任による教育相談では生徒1人と話す時間が15分程度であったが、問題傾向のある生徒や不登校やいじめられる心配のある生徒とは普段から積極的に話をしてきたが、反対に、特に心配が無いと考えられる生徒とは、ゆっくりと話し合う機会を持つことが少なかったため有効な時間であった。また、生徒との人間関係を築く場となった、という担任の感想が多くあった。

さらに、全職員に教育相談終了後、取り組み方や感想についてのアンケートを実施し、そのまとめた結果を報告し、学校全体で教育相談に取り組む姿勢について情報交換を行い、今後の教育相談に役立ててもらった。この相談週間をステップとして、継続される教育相談に発展させるとともに、より信頼関係を深め、成長を援助する教育相談へとさらに、研修を深めていきたい。

IV まとめと今後の課題

カウンセラー研修から多くのことを学ばしていただいた。面接が終了するたびに「来週の予約はしたけれど、来てくれるだろうか。」「相手の立場になってともに考えることができただろうか。」「心配な気持ちで一杯だった。子どもは毎週一回も休まずに来所してくれた。少しでも彼の手助けができたのかもしれないと思うとうれしい。

中学校現場では教師と生徒がたとえ気まずい関係になっても両者ともそこから逃げることはできない。どのような状態でも、毎日、教育活動のなかで関わりを持たなければならない。このような気まずい関係にならないために、教師として生徒を知る、生徒を理解するためにどのような関わりを持つことが重要か、改めて、考える必要があると思う。

また、現在の中学校では生徒指導が多岐にわたる為、教師が問題行動の対応に追われ、真の意味での問題解決にはなかなか取り組めない。問題解決のために継続した相談面接が必要と思う。しかし、現状は難しく、教育相談が十分にされていない面が見られる。問題行動を起こした生徒の保護者と相談面接を行ったが、事件直後の保護者の気持ちと、その後、その問題行動が落ち着いてきた時の保護者の気持ちには大きな差があったように思う。

この子のためにともに考えていきたいという気持ちが相互により伝わるに従って、保護者も心を開いて話をしてくれたように思う。

放課後の部活動、委員会活動等も教育相談のなかで重要な活動である。今後はさらに、それらの活動を活発にするなかで、一人ひとりの生徒との関わりを深める方法についても模索していきたい。指導的に、指示的に生徒と接することでは難しい。教育活動が円滑に行われるためには、教師が生徒理解に努め、相互の信頼関係を深めていくことが大切と思う。そのためには、様々な場面で教育相談的な関わりを教師が持つことが必要であり、授業等の教育活動で生徒一人ひとりを大切に、生徒の個性を伸ばして成長を援助ができるような関わりを今後も大切にしていきたい。

おわりに

カウンセラー研修で、教育相談の重要性を知るとともに、自分自身が教師として新たなものを発見できたように思います。今後の教育活動の中で仲間の教師とともに研修を深め、生かしていきたいと思います。最後になりましたが、研修の機会を与えていただいたことに感謝するとともにご指導いただきました室長、指導主事、相談員の皆様に心よりお礼を申し上げます。

・参考文献

- 国分康孝 「学校カウンセリングの基本問題」誠信 1989年刊行
中山巖 「教育相談の心理ハンドブック」北大路書房 1992年刊行
藤原喜悅「学校教育相談の実際」 教育出版 1985年刊行
VWアクスライン「遊戯療法」 岩崎学術出版社 1972年刊行

・指導助言者

川崎市総合教育センター研修指導主事 鈴木 眞一